

マイルズ・ホートンの変革の成人教育に関する考察

—シカゴにおける知的体験を中心に—

藤村好美

(2004年9月30日受理)

A Study on Myles Horton's adult education for social change:
Focusing upon his intellectual experience in Chicago

Yoshimi Fujimura

Myles Horton, a founder of the Highlander Folk School, is called the Giant of the adult education movement in the United States. He aimed at the empowerment of the poor people in the South, which was called "the third world in America", because of its miserable situation.

Horton's idea and practice in adult education for social change owes a lot to his days in the University of Chicago. He had learned sociology from Robert Park, and had visited the Hull-House to discuss with Jane Addams. Thus he established his own way of nonformal adult education, which led to the idea of the Civil Rights Movement in the 1960s.

This paper focuses upon his experience in Chicago around 1930. First, in order to make his Chicago days clear, it summarizes Horton's brief life history. Secondly, it attempts to describe his intellectual experience under the guidance of Robert Park: he took Park's collective behavior theory and conflict theory in his nonformal education practice. Thirdly, it focuses upon the intellectual interchange between Horton and Addams: In fact, the Highlander Folk School has some aspect of a settlement house. Lastly, it summarizes Horton's hope to make an alternative education system which supports people's decision making process. Thus, it depicts Horton's greatness as sociologist and adult education activist.

Key words : Adult Education, Chicago School, Highlander Folk School, Hull-House, Jane Addams, Myles Horton, Robert Park, Social Change

キーワード：成人教育，シカゴ学派，ハイランダー・フォークスクール，ハル・ハウス，ジェーン・アダムズ，マイルズ・ホートン，ロバート・パーク，社会変革

はじめに

今日のアメリカの成人教育の特徴は、その多様性にあるが、教育行政の保障する成人教育は、国家の一員であるアメリカ市民を育成することに主眼がおかれており、職業教育やアメリカナイゼーション教育が中心となっている。しかし一方で、このような国家の安定と秩序の維持を目指すフォーマルな成人教育に対し、社会の矛盾を指摘し、民衆のエンパワーメントと社会の変革を目指す成人教育の伝統が、アメリカの地にも、連綿と続いている。

南部テネシー州ニューマーケットで、今日、民衆を巻き込んだ環境保護運動や組織づくり教育に尽力しているハイランダー研究教育センターは、このような変革の成人教育の伝統を引き継ぐ、民衆のエンパワーメントの場である。その前身は、戦間期にアメリカ南部テネシー州のモンティエグルの山間地に誕生した、ハイランダー・フォークスクールである。その創設者であり、理念的指導者であったマイルズ・ホートン(Myles Horton: 1901~1990)は、「アメリカ国内の第三世界」と呼ばれ、アメリカ合衆国にありながら全く別世界の様相を呈した深南部の貧困地域に居を構

え、民衆と共に生き、学び、行動した。彼は白人貧困層や黒人労働者層を対象に、民衆のエンパワーメントを目指す参加型学習の場を作り、民衆の協同を組織したのである。その教育方法には、彼のシカゴ大学社会学大学院時代の知的経験が大きく影響している。

そこで本稿では、ホートンのシカゴ時代に焦点を当て、当時の彼の経験が、その後のハイランダーでの教育実践としてどのように開花したのかを考察していきたい。

I ハイランダー・フォークスクールの設立とマイルズ・ホートン

ハイランダー・フォークスクールが創設された1930年代のアメリカでは、大量の移民の波を背景として、成人教育はアメリカナイゼーション教育を中心として、好ましいアメリカ市民を形成するための教育に主眼が置かれ、それに対して何ら疑問も呈されなかった。大恐慌という不安な社会状況にも関わらず、そこでは、民衆の苦悩を解決し、生活を向上させ、社会の矛盾を取り除くということは図られず、現体制を肯定、維持し、人々をいかに現状に適応した「アメリカ市民」とするかが課題であった。そのような制度的に整った適応型の成人教育に対し、ホートンは、苦悩の中で、別の形の民衆の学びの場を求め続けた。すなわち彼は、ノンフォーマルな形態を取り、社会で不利益を被っている民衆をエンパワーするような「社会変革の成人教育」を目指したのである。

1928年にテネシー州レバノンのカンバーランド大学を卒業してから1932年にモンティエグルにハイランダー・フォークスクールを開校するまで、彼は理想とする民衆学校の姿を求めて、模索の旅を続けた。大学卒業後のホートンは、1929年にはニューヨーク州のユニオン神学校に入学し、ラインホルド・ニーバー(Reinhold Niebuhr)に師事した¹⁾。彼はニーバー神学を理解しようと苦闘するが、その後神学校での勉学を中断し、シカゴ大学大学院に進み、シカゴ学派のロバート・パーク(Robert Park)の社会学理論を学び、大きな影響を受けた。またこの頃彼は、シカゴのハル・ハウスにジェーン・アダムズ(Jane Addams)を尋ね、彼女のソーシャル・ウェルフェアの思想と実践にも強い感銘を受けたのである。

ホートンはシカゴ時代を経て、その後1931年には、デンマークのフォルケホイスコーレ視察の旅に出る²⁾。フォルケホイスコーレの生みの親であるグルントヴィ(Nicholai Frederik Severin Grundtvig)の理念は、後のハイランダーの教育実践に多大な影響を与えたと

言われているが、シカゴにおいてホートンが受けた影響は、それに勝るとも劣らない大きなもので、社会変革をめざすハイランダーの教育方法に大きな関わりを持っている。

なお、表1に、ハイランダー・フォークスクールの実践とホートンの足跡を略年表として示した。

II ホートンとロバート・パークとの出会い

ホートンは、ニューヨークのユニオン神学校において、ニーバーのもとで、キリスト教社会主義について学ぶと同時に、デューイ(John Dewey)、カウンツ(Gearoge S. Counts)、ハート(Joseph K. Hart)、リンデマン(Eduard Lindeman)などの、多くの著作を読んだ。その中で、彼の関心は、次第に神学から社会学へと動いていった。

1930年、ホートンはユニオン神学校を出て、社会学を学ぶべく、シカゴへと赴く。しかし、彼は社会学の学位を取ることを志しはせず、あくまでも、成人教育の実践のためのヒントを求めて、社会学にアプローチしたのである。彼は、後にシカゴ大学での学問的体験について、「私は初めて、単位や学位に関係なく、学びたいものを学んでいた」と、感動をこめて、回想している。また彼は、ロバート・パーク率いる当時のシカゴ学派の社会学への関心について、次のように語っている。

「私は、不平等な状況下において、いかに根本的な変化が起こり得るかを理解しようと、闘争(conflict)について本を読んだ。私は、人々を統制下に置いたり人々を無力にするような形で、闘争状況を解決することには、関心がなかった。私は、このような状況に対処する仕方に関して、偶然、社会学的調査や社会学の論文に出会った。そして、シカゴ大学の社会学部には、社会変革について研究している人たちが多くいることを知った。特に、シカゴ大学のロバート・パーク教授は、アメリカの生んだ有名な社会学者であった。そこで、私は、人々が社会的闘争を解決し社会を変革することを助ける方法について、社会学に学ぶべきことはないかを確かめるために、1930年、シカゴへと向かったのである。」³⁾

ホートンは、パークから、「集団による問題解決についてと学習の手段としての闘争について学んだ」⁴⁾と述べている。ホートンが咀嚼したパークの都市社会学

表1. ハイランダー・フォークスクールの実践とマイルズ・ホートンの足跡

年	
1905	7月9日、マイルズ・ホートン、テネシー州サバナに生まれる。両親は元教師。祖先は、スコットランド、アイルランド系。宗教は、プロテスタント長老派教会に属す。
1924	秋、テネシー州レバノンのカンバーランド大学に入学し、英文学を専攻。
1927	大学在学中、カンバーランド学生YMCAの会長となり、労働者の権利に強い関心を抱くようになる。夏、テネシー州オソンの長老派教会の聖書学校で、成人を対象に集会を開き、民衆の強い学習意欲を知る。
1928	春、カンバーランド大学卒業。テネシー州学生YMCAの書記として就職し、定期的な成人教育プログラムの設立に奔走する。
1929	秋、ニューヨーク市のユニオン神学校に入学。ラインホールド・ニーバーに師事し、キリスト教社会主義の思想に接する。社会主義や共産主義の多くの書物を読む。
1930	秋、シカゴに移り、シカゴ大学社会学大学院の講座に参加するようになる。ロバート・パークに師事。同時期、シカゴのハル・ハウスを頻りに訪れ、ジェーン・アダムズの思想の影響を受ける。また、シカゴ大学ソーシャリスト・クラブの会長ともなる。
1931	秋、デンマークにフォルケホイスコーレ視察の途につく。創始者であるグルントヴィの理念には大いに関心を持つが、現状のフォルケホイスコーレには失望を抱く。
1932	5月、デンマークより帰国。民衆学校に適した地を求めて歩くと共に、資金の調達やスタッフの招集に奔走。11月1日、テネシー州モンティエグルにハイランダー・フォークスクール開校。
1932～1950	南部の労働者や農民の組合の組織化を支援。
1953～1960	公民権運動を陰に陽に後援。
1961～	ハイランダー研究教育センターとしての新たな出発。

のポイントは、集合行動論と社会的闘争の理論の2点に整理することが出来る。

<集合行動論 (collective behavior) >

ここで、集合行動とは、群衆や公衆を含めた非制度的状況下で生じる集団の行動であり、パニック、暴動、ストライキ、デモ、社会運動、革命、世論、流言などがそれにあたる。パークは、集合行動を「社会がその諸要素へと解体し、それら諸要素が合わさって、再び新たな関係を取り結び、新たな組織へと社会を形作る過程を示す現象のことを指す」と定義している。彼は、群衆や公衆を、社会変革の母胎と捉えている。すなわち、中野正大の言葉を借りれば、パークは、「社会の変革過程を、ひとびとの行為がいったん既存の安定的な社会の文化的基盤から脱マウント化された非制度的状況下（社会不安）において、新たな感情や理念のプログラミング（集合行動）がなされた後、「新たな社会」へと再マウント化（制度化）されるような、いわば『リセット』のイメージで捉えていた。そして彼は、こうした過程が社会変革に際して繰り返し現れるパターンであると考え、それを「自然史」(natural history)と呼んだ。その中で集合行動は、社会変革の自然史を媒介する「社会の再プログラミング過程」

として位置づけられていたのである。⁵⁾

ホートンは、集合行動について学んだことにより、組織として集団で行動することで、社会変革を実現できることが可能だと確信し、次のように述べている。これは、彼のハイランダー・フォークスクールにおける実践に、大きなヒントとなったに相違ない。

「私はシカゴで、社会運動について、組織がいかにして動いていくかということについて、多くを学んだ。私は、物事は組織を通して行われるべきであると自覚するようになった。つまり、人々はひとりひとは無力だが、組織として団結して、組織に使われるのではなく、組織を活用することが出来れば、力をつけることが出来るということを知ったのだ。私は組織が重要であることは知っていたが、(それまでは)組織が人々に行うことをいつも恐れていた。私はかつて組織について述べたとき、その構造が永久不変なものとなると、その有用性は失われてしまうと述べたことがある。このことは、私とハイランダーとの関係を考えるとき、大変重要な意味を持つようになった。団体というものは、抑圧的になったり、有用性を失ったり、人々の活力を奪うものであってはならない。私は組織と個人の関係につ

いて、たいへん気をつけていたのだ。」⁶⁾

ここから、ホートンは常に、組織が独走しないように気を配っていたことが伺える。彼は、ハイランダー・フォークスクールにおけるワークショップを通して、社会の矛盾を解決し、ひいては社会に変革をもたらそうとはしたが、それが彼の独断ではなく、常に民衆の自主的な意志を重視したことは、その実践を見ると明らかである。例えば、黒人の識字力の向上を目指した、1950年代の市民権学校プログラムにおいても、ホートンは、控えめすぎると思えるほど、指導には禁欲的であった。そして、民衆自らが、集団の中で互いに学びあうことを大切にしていた。彼は、組織を自ら動かして何かを成し遂げることは、ある意味で煽動になる危険性があるということを、自覚していたのであろう。

ともあれホートンは、パークの集合行動論を方法論として咀嚼し、1930年代から1950年代にかけて、南部の労働者や農民の組織化を進めていく。例えば、1933年には、テネシー州カンバーランド林業労働者連盟を結成し、それは後に労働組合にまで発展した。このきっかけとなったのは、材木会社のために低賃金で働くことを余儀なくされていた山間部に住む林業労働者たちのストライキであり、その後ハイランダーにおいて労働者たちがワークショップを定期的に行い、そこから組織づくりが進められたのである。この労働組合は、当初は森林の破壊の阻止と林業労働者の賃金の確保を目指したが、その後、運動はさらに広がりを見せ、女性組合員を中心に、地域社会を援助し、生活の向上を目指して、あらゆる組合活動を行う「ハイランダー民衆協同組合」が結成されるまでに至った⁷⁾。

続いて1930年代後半から1940年代にかけて、ホートンは、林業労働者のみならず、あらゆる労働者の組織化に乗り出した。すなわち、ハイランダーは、当時南部の労働者の組織化を進めていたCIO（産業別労働組合会議）との連携を深め、その組合員の教育を受け持つこととなったのである。

<闘争の理論>

パークとバージェス(E.W.Burgess)は、『科学としての社会学入門』(Introduction to the Science of Sociology)の中で、ジンメル(Georg Simmel)の英訳論文を掲載し、人々が出会い、集合し、そして一定の社会生活を営むに至るプロセスを、「競争」(competition)、「闘争」(conflict)、「応化」(Accommodation)、「同化」(Assimilation)という4つの相互作用類型を用いて示そうとした。パークとバージェスは、「闘争」から「応化」へ

の移行について、次のように述べている。

「闘争と応化の本質的な関係について、ジンメルは戦争と平和、及び和解に関する論文の中で、次のように述べている。『平時こそ、戦争が勃発する状況を示している。』逆説的であるが、戦争は、闘争状態にある集団間の調停をもたらし、平和を可能なものとする。従って、平和な状況から生じる闘争を、戦争に訴えることなく、調停へと進展させる方法を見つけ出すことが課題である。』⁸⁾

すなわち、相互の利害関心がぶつかりあっている社会関係に何らかの社会的な制御が加わることによって、闘争状態にある諸個人あるいは諸集団の間に、均衡の萌芽状態が出現するのである。「闘争」と「応化」の関連性を論証することは、人種間闘争を考察する上で重要である。

ホートンはテネシー州に戻り、南部の人種間コンフリクトの渦中に再び入り込んだとき、都市と地方という違いは有るにせよ、黒人と白人間の人種間闘争という類似の状況を、シカゴとモンティエール双方に見いだした。彼は後に、次のように回想している。

「闘争を解決しようとするのではなく、社会変革という文脈で前進するために、闘争を積極的に利用しようという私の考えは、意見の相違もあったが、ロバート・パークとの討論を通して確立していったものである。彼は私よりも、闘争を解決することに関心を持っていたが、ともあれ彼は、闘争とはどのようなもので、社会学的にどのような働きをするかを、私が理解できるよう助けてくれた。私はその知識を、彼とは別の方法で応用したのだが、それを学んだのは確かに彼からであった。」⁹⁾

ホートンは、「闘争」の理論と人種問題への視点というシカゴでの知的体験を、後に一連の非暴力主義に基づく公民権運動の支援へと開花させている。すなわち、ハイランダー・フォークスクールにおいて、人種隔離撤廃のための黒人と白人共同のワークショップ、黒人を対象とした市民権学校プログラムにおける識字教室とその成果に基づく有権者登録運動、人種隔離に抗議した黒人学生による座り込み運動の支援等、1950年代から1960年代にかけて、公民権運動の基盤づくりを、徹底して行ったのである。

すなわち彼は、人種間の不平等という問題解決の手段として、闘争の手法を用いたが、その闘争は、力を

伴うものではなく、非暴力主義に基づく闘争なのであり、その理念は、マーティン・ルサー・キング (Martin Luther King, Jr.) の非暴力主義へと結実するのである。彼は、後にインタビューに答えて、こう語っている。

「闘争を用いるということは、何かを解決するためにそれを使うのではなく、より高い次元でその解決がもたらされるように、用いるのです。例えば、公民権運動では、私たちは黒人と白人の平和的な関係を作ることに関心を持っていたのではありません。まず、黒人が権利を獲得しなければならないのです。そして私は、自分が南部の白人だからわかるのですが、南部の白人に (人種間の平等について) 教育する最短の道は、白人に働きかけることではなく、黒人が立ち上がって、(自分たちが) 平等に扱われるようにと要求することなのです。そうすることによって初めて、黒人を対等の人として尊敬するように、南部の白人を教育することが出来るでしょう。それが一番の近道です。これが、私たちの哲学だったのです。」¹⁰⁾

Ⅲ ホートンとジェーン・アダムズとの接点

シカゴ時代、ホートンに影響を与えたもうひとりの人物に、ジェーン・アダムズがいる。前述の通り、ホートンは1930年にシカゴ大学大学院に進んだが、当時のシカゴ大学の社会学研究室とジェーン・アダムズの設立したハル・ハウスとの間には、密接な関係があった。すなわち、両者は互いに学問的、実践的交流を行っていたのである。シカゴ大学は1892年にウィリアム・R・ハーパーによって創設されたが、シカゴ大学創設より3年前の1889年に、ジェーン・アダムズは、シカゴに、ハル・ハウスという名のセツルメント・ハウスを設立している。当時のシカゴは、無秩序で刺激的な都市であった。多くの新移民の流入、産業化、急激な都市化、そして退廃が、渦巻いており、混沌とした都市は、変化と秩序を必要としていた。

アダムズはそのシカゴの混沌に挑戦した。彼女は、19世紀末、何度かヨーロッパを訪れているが、1887年、ロンドンで世界初のセツルメントであるトインビー・ホールを訪れ、感銘を受け、同じような施設をシカゴに作ることを思いついた。「アダムズは、平和の希求、害悪との闘い、そしてデモクラシーに対する強い願いを実現することで、都市に新しいモラルと秩序を呼び起こすことが出来るとの希望を持っていた」¹¹⁾

のである。

彼女は、ユダヤ系やイタリア系の新移民の多く暮らすハルステッド通りとポーク通りの交差点近辺のスラム街にハル・ハウスを建て、自らそこに定住して、仲間のレジデントと共に、人々の生活の向上や社会参加を促す活動に従事した。読書会から始まった活動は、移民向けの市民権の学習会や読み書きの教室、成人教育、スポーツや趣味のクラブ、演劇やダンスのプログラム、芸術鑑賞、料理や裁縫の教室、公衆浴場、託児所、診療所、訪問看護、予防注射、図書館、さらには、政治討論会、教育改革や職場改革の講義、会場場所、相互扶助会、社交クラブなど、しだいに広がっていった。¹²⁾

そして、当時のシカゴ大学の社会学教室もまた、ハル・ハウスと同様の希望を持ち、教員自らを、学生を、そして社会全体をエンパワーするべく、研究室から外へ出て、社会福祉実践活動に従事したのである。教員はしばしばハル・ハウスを訪れ、講義やハル・ハウスのレジデント達との討論などを行った。また、アダムズもシカゴ大学の公開講座で授業を行い、相互の交流が繰り返された。

このような状況の下で、ホートンもまた、社会学の授業の一環で、しばしばハル・ハウスを訪れ、アダムズから直接話を聞いていた。ホートンは、アダムズについて、次のように述べている。

「彼女は大変親切に私が考えるのを助けてくれた。ある時、私たちはデモクラシーについて話し合い、私は彼女にこう尋ねた、『ところであなたは、デモクラシーとは何だと思われますか。』すると彼女は答えた。『デモクラシーとは、人々が意志決定する権利を持つことです。地方の店に人々の集団がいて、何か問題について話し合っていると仮定しましょう。問題解決の方法には二通りあります。ひとつは、自分たちがどうすべきかを役人に尋ねて判断を仰ぐことです。またもうひとつは、自分たちで話しあって解決策を探ることです。(後者のように) 人々が自分で行動することが、デモクラシーです。』私は彼女に、どのようにして、そのような考え方をするようになったのかと尋ねた。すると彼女は、自分の父親から聞いたのだと答えた。彼女の父親は、アブラハム・リンカーンの友人だった。私は彼女に、その助言は悪くないと伝えた。」¹³⁾

ジェーン・アダムズの父、ジョンは、クエーカー教徒の上院議員で、リンカーンの親友であった。ジェーンは2歳で実の母を失い、父親の影響を強く受けてい

た。ホートンは後に、彼を含めた民主的な思想の系譜について、リンカーン、ジョン・アダムズ、ジェーン・アダムズ、ホートン、ローザ・パークスやマーティン・ルサー・キングという繋がりがあると、語ったこともある。

ホートン個人のみならず、ハイランダー・フォークスクールにも、ハル・ハウスが息づいている。しかし、ハイランダーはハル・ハウスの相似形でもなければ、セツルメントそのものでもない。そこで次に、ハル・ハウスとの比較の中で、ハイランダーの特色を探っていきたい。

まず学習形態を見てみよう。ハイランダーでは、ハル・ハウスと同様、学習者も指導者も、寝食を共にして学ぶ宿泊型の学習形態をとっている。ちなみに、セツルメントにおける成人教育は、3Rが特徴であると言われている。すなわち、Residence（支援者が施設に住み込む）、Research（問題を把握するための徹底した社会調査の実施）、Reform（それに基づいた社会改良の実践）である。この3Rをハイランダーに当てはめてみると、そのどれもが当てはまるが、ハイランダーがセツルメントと異なるのは、学習者が、ワークショップが開催される期間のみ、各地から（時には州の境を超えて）やってくるという点である。学習者は、セツルメントのように、ハイランダーの近辺に常に居住しているというわけではない。

次に学習内容を見てみると、両者は非常に似通った点があることに、驚かされる。すなわち、社会の矛盾を見据えた運動体としての学習課題を有している点である。都市部と山間部というように、両者の環境は異なるものの、人種問題への視点、識字教育や市民権の教育等、社会変革をめざす成人教育という点で、一致している。

アダムズを含め、多くの識者が、ハイランダーは、民衆学校とか成人教育センターというよりも、山地のセツルメント・ハウスのようなものだと、指摘している¹⁴⁾。しかし、ホートンは、ハイランダーの活動は、セツルメントのそれとは異なると強く自覚していた。グレン (John M. Gren) は、それについて次のように述べている。

「学年歴1930-1931年度、彼（ホートン）は数回ハル・ハウスを訪れ、ジェーン・アダムズや彼女の同胞のアリス・ハミルトンに、彼の考えの萌芽について話をした。ホートンは、アダムズが、彼の構想している学校は、『地方のセツルメント・ハウス』のようなものであると表現したことに一応同意はしたものの、彼は、自分の実践は、（セツルメント・

ハウスとは異なり）、セツルメント・ハウスの教育方法の一部を用いた教育プログラムであるとみなしていた。」¹⁵⁾

では、ハイランダーを、セツルメント・ハウスと区別するものは何か。それはハイランダーの教育方法を見れば、明らかである。ハイランダーは、ワークショップという参加型のアプローチをとる。つまり、そこでは教育者と学習者の区別は歴然としていない。例えば市民権学校プログラムでは、識字学級の生徒が次の識字学級の指導者となる。ホートンはあえて、教育の専門家を指導者にするには否定的であった。ハイランダーにおいては、学習者が指導者になり、指導者が学習者になる。学習者は、教えられる客体ではなく、自己教育の主体なのである¹⁶⁾。この点で、ソーシャル・ウェルフェアの体現であるセツルメント・ハウスとハイランダーは、似て非なるものであると言える。

終わりに

ホートンは、貧困、失業、差別に苦しむ南部の人々の生活と社会の矛盾を目の当たりにして、カンバーランド大学の学生の頃から、民衆のための学校の設立という目標に駆られ続けた。彼がニューヨークのユニオン神学校へ進学したのも、社会学を学ぶためにニューヨークからシカゴへ赴いたのも、そしてフォルケボイスコーレとは何かを知るためにシカゴからデンマークへと旅だったのも、「民衆のための学校のモデル」という青い鳥を探し求めたゆえであった。そして、その意識の根底には、既存の公教育システムへの不信があったのである。

青い鳥を求めたホートンが、シカゴでつかみとったものは、パークの社会学理論に触発された組織づくりの教育論と、アダムズの間人中心のソーシャル・ウェルフェア思想であった。理想的な学校のモデルを探し求めてしばらくデンマーク国内を奔走し、悶々とした日を送った後、彼は「青い鳥は近くにあったのだ」¹⁷⁾と日記に記し、帰国を決意している。まさに、シカゴにおける知的経験が、デンマークで熟成し、ホートン独自の民衆学校の原型が形成されたのである。

後に彼は、自らの40数年のハイランダーでの活動を総括して、“Decision-Making Processes”という論文を著しているが、その中で彼は、教育のプロセスは意志決定のプロセスであり、「意志決定のプロセスを民主化することに、唯一希望が存在する」¹⁸⁾と述べている。そして学校教育であれ成人教育であれ、フォーマルな公教育のシステムでは、意志決定は常に官僚的

にトップ・ダウンで行われ、人々が自らの人生を選択することは難しい、と指摘している。彼は民衆の自己決定の力を信じ、生涯にわたって、民主的な意志決定を実現するべく、ノンフォーマルな民衆の自己教育の実践に献身した。彼の意志決定に対する強い信念は、ハル・ハウスにおける彼とジェーン・アダムズとの会話を彷彿とさせる。ホートンの成人教育理念の根底には、アダムズの「デモクラシー」理解が息づいていると言えよう。

ホートンの思想の系譜を振り返るとき、筆者は、民衆のエンパワーメントという壮大な流れが時代を超えて連綿と生き続けていると思わずにはいられない。これについて最後に、次のようなディーガンの言葉を引用して、まとめたい。

「ここで、ホートンの複雑な教育実践について全てを言及することは出来ない。しかし、アダムズとパーク、アフリカ系アメリカ人の公民権、コミュニティ・エンパワーメント、そして社会学的見解が、人々をデモクラシーやコミュニティに結びつけるのだということを、指摘することは出来る。ホートンは、社会学のベールの陰で活動したのだが、パークのもとで研究活動を行った他の多くの学者たちを超越していた。彼の生涯にわたる実践は、HHSRR (ハル・ハウス人種問題研究会)、PCSRR (人種問題シカゴ学派パーク研究室)、AACSR (人種問題シカゴ学派アフリカ系アメリカ人会) と関わりを持ち、その生涯は社会学の人種問題理解の変遷の歴史と重なる点がある。彼は、社会や国家、人種の違いを超越する能力を持った、創造性の体現に他ならない。」¹⁹⁾

【注及び引用文献】

- 1) ホートンの成人教育理念の形成にニーバーが与えた影響に関しては、藤村好美「マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成—ニーバーのキリスト教社会主義思想の影響について—」『日本社会教育学会紀要』 No.33, 1997を参照。
- 2) グレントヴィのフォルケホイスコーレ構想とホートンに関しては、藤村好美「マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成過程—ハイランダー・フォークスクールの設立とグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想—」東京大学大学院教育学研究科教育計画講座社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』第21号, 1997及び、藤村好美「マイルズ・ホートンの成人教育実践の分析—グルントヴィの理念の実現に焦点をあてて—」『生涯学習フォーラム』 第7巻第1・2合併号, 2004を参照されたい。
- 3) Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *The Long Haul: an Autobiography*, New York, Teachers College Press, 1988, p.46.
- 4) *Ibid.*, p.47.
- 5) 中野正大, 宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 2003, 227頁。
- 6) Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *op.cit.*, p.49.
- 7) John M. Glen, *Highlander: No Ordinary School 1932-1962*, Lexington, the University Press of Kentucky, 1988,.
- 8) Robert E. Park and Ernest W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, Chicago, the University of Chicago Press, 1969, p.309. なお, competition, conflict, accomodation, assimilationの訳語は, 中野正大, 宝月誠編, 前掲書によった。
- 9) Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *op. cit.*, p.47.
- 10) Bill Moyers, "The Adventures of a Radical Hillbilly: An Interview with Myles Horton", in *Appalachian Journal*, Volume 9, Number 4, Summer 1982, p.271.
- 11) Mary Jo Deegan, *Race, Hull-House, and the University of Chicago: A New Conscience Against Ancient Evils*, Conneticut, Praeger Publishers, 2002, p. 3.
- 12) 中野正大, 宝月誠編, 前掲書, 79-80頁。
- 13) Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *op.cit.*, p.49.
- 14) Thomas Bledsoe, *Or We'll All Hang Separately: the Highlander Idea*, Boston, Beacon Press, 1969, p.141.
- 15) John M. Glen, *op. cit.*, p.12.
- 16) ホートンの教育方法の特徴に関しては, Myles Horton, "Decision-Making Process" in Nobuo Shimahara ed., *Educational Reconstruction: Promise and Challenge*, Columbus, Charles E. Merrill Publishing Company, 1973を参照。
- 17) Frank Adams with Myles Horton, *Unearthing Seeds of Fire: the Highlander Idea*, North Carolina, John F. Blair, Publisher, 1975, p.25
- 18) Myles Horton, *op. cit.*, p.334.
- 19) Mary Jo Deegan, *op.cit.*, p.165.